



お江戸舟遊び瓦版 1056号

水彩都市江東 ころろ美しい日本の再生 安全・安心まちづくり

お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会 江東区千田 13-10

星野克美 「人新世の絶滅学 (1)」

～人類・文明絶滅の思弁的空無実在論～ 鳥影社 22・11・30

はしがき

人類は、「絶滅危惧種」になった。過去「生物の大絶滅」が5回起きている。現生人類が超絶的な科学技術と地球規模の工業文明を発展させ「地球地質構造」を極度に改悪し、遂に6度目の大絶滅を起こす新たな時代が始まったと、科学者たちが警告した。

人類はすでに「自然本能」を喪失し、「文明の恩恵」を永遠に享受することを希求し、逆に人類の生存をさえ脅かすものになっている。

産業革命以降のわずか250年余りに、CO2排出増加によって「地球機構造」を激しく破壊し、生物と人類の共存条件を悪化させてきた。



第一編 形而下の絶滅学 第1部 預言 第1章 人類絶滅の預言

- ・ 「人新世」問題とは、「人類絶滅」問題である。人類は700万年前に発生したが、今日生存する現生人類は26種目に当たり、その前に生存していた25種はすべて絶滅し、現生人類だけが生き残ってきたが、環境や生存条件が悪化すれば絶滅の可能性がある。
- ・ 工業文明がCO2の大量排出によって「地球温暖化と機構危機」を起こし、大絶滅を起こすことになる。2020年に発した「パンデミック」と「パニック」が「絶滅の脅威」をもたらす前兆である。

第2部 覚醒

現生人類は、自ら招いた大絶滅の事態に「覚醒」することが急がれる。

第2章 「人新世」の絶滅科学

- ・ 地球史はもう「完新世」ではなく、「人類が地球地質レベルの大きな影響をもたらした」ことによって、人新世になったという学界の共通認識が生まれた。2015年にCO2濃度が400ppmを超えたと公開されたとき、インターネット上で大騒ぎとなった。「現生人類の絶滅と消滅」は「60年後の今世紀末前後」にも起きる可能性が指摘され、「人新世大絶滅」は驚愕的な出来事となった。
- ・ 1779年に、石炭燃焼による蒸気機関が発明され、鉱山の揚水や紡績機械の動力として利用され「産業革命」の推進力となった。同時に、石炭の採掘と燃焼が増えて、人為の影響によるCO2濃度の急上昇が始まることになった。人類が築いた工業文明が余りに巨大で、膨張を続けているために、「絶滅圧力」に屈して消滅に向かっている。
- ・ 針葉樹の場合も、穀物・野菜などの植物と同様に、「大気温度40℃レベル」では、植物の「生命機能」といえる光合成の活動が大きく低下し、生命維持が困難になる。

第3章 「地球地質改悪と惑星限界」の科学研究

- ・ 絶滅の原理は、「地球熱化と熱室化と熱死」によって、人類・植物・哺乳類が今世紀末前後を過ぎる頃には「絶滅・消滅」するということである。
- ・ 地球地質構造の改悪とは、①地球惑星上の自然資源を膨大に消尽して、②巨大な人工物の工業文明を構築し、③膨大な人工物の廃棄物を地球惑星の上に放出し、工業文明が滅亡する。
- ・ ザラシーウィツは、アルミニウム総量は5億トン、プラスチック3億トン等を生産するとともに、人類は地球上の全生物の約1/4を自分たちの食料に使っていると指摘している。
- ・ 「人新世」の問題は、地球地質学・層位学などの視点では、人工物の廃棄やその痕跡が、地球地質構造を改悪して「新たな人工物の地層」を形成することを重視している。人類が生み出した「新たな地球地質の時代：人新世」が到来したのだ。

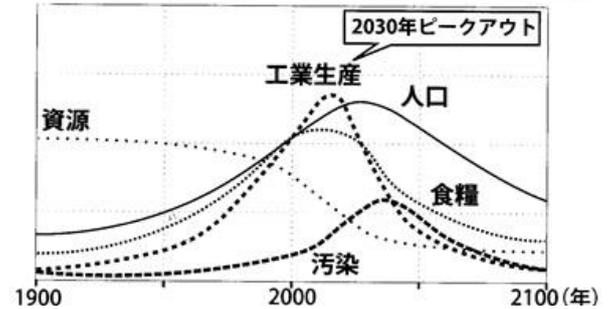
- 右図は、資本主義の経済循環の根源的な構造を簡略に示したもので、近代に始まった「科学革命・産業革命・経済革命」によって工業文明を構築し、人類が生存する限りは「投入⇒産出⇒排出」という活動を止めることができない。人類がこの活動を止めない限りは、「人類の汚物」が累々と地質の中に蓄積されていくことを避けられない。



第4章 「地球資源枯渇」の科学研究

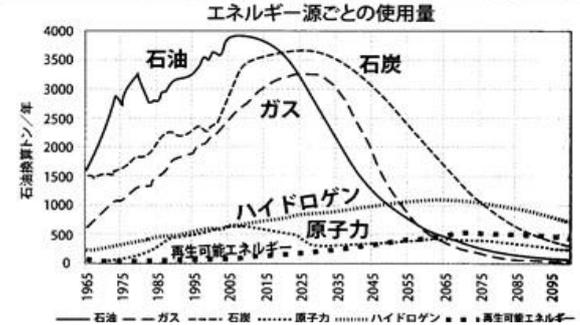
- 「成長の限界—ローマクラブ“人類の危機”レポート」によると成長の限界は2030年にピークアウトを迎え、資源の投入の増減、工業生産の増減、食糧と人口の増減をもたらす「資源投入⇒工業生産産出⇒汚染排出」の因果関係で構成されている。
- 『成長の限界』以前から、1950～70年代に「ピークオイル」と石油資源の枯渇の研究が活発に始められていた。石油生産は2005年にピークアウトし、漸減し、今世紀中頃に枯渇に向かうことになる。

図14 成長の限界 (2002年版)



- 18世紀後半から石油採掘が始まり、20世紀には自動車や航空機や船舶で石油資源が大々的に使用され、プラスチックや医薬・農薬などにも石油資源が使われ、石油火力発電が電力供給の主力となって、工業文明は石油文明と言われるほどに。
- 石油文明研究者のポール・チャフーカが、世界の総エネルギーの将来(右図)を予測し、2005年頃ピークアウトしてから急速に減少し、今世紀末に枯渇する。ガス生産の推移も同じような推移をたどると見られるが、COP21のパリ協定で脱炭素や脱石炭の世論の高まりで減少化が前倒しになる可能性があり、併せて世界人口が10億人に減少する可能性を予測している。

図19 P.チャフーカ：世界エネルギー予測



- 化石燃料の大量使用は産業革命で始まったが、銅の使用は1万年前の紀元前8000年頃、鉄を使用し始めたのは5500年前の紀元前3500年頃とされ、金属使用の歴史は古い。工業文明の発展で、人類は金属使用の分野を広げ、金属を大量に使用したために、多くの金属も枯渇が迫ってきた。
- 水資源枯渇や土地資源の制約によって「食糧資源の危機」の激化が予測され、人類・文明の「内部の絶滅圧力」になると懸念されている。人類生存の重要な資源であった地下水層(化石水)の現状と将来予測の研究によると、水資源の枯渇そのものが健康維持・生命維持にとって脅威となるが、水資源の枯渇は農業生産の制約になって食糧危機にも直結する。
- 世界各国の「生物多様性・環境サービス (BES)」の評価を行い、動植物の25%の100万種が絶滅の危機にあり、さらに加速し6度目の大絶滅を予測している。
- 700万年前にアフリカで発生した人類は、工業文明を発展させ、地球規模に拡大し、植物・動物を食し、生存を維持してきたが、世界各地における「水資源・食糧資源・生物資源」危機で、人類絶滅はもはや不可避となったと認識させられる。

所感：700万年前に発生した人類は、過剰な工業文明の進歩の中で、金属資源の限界、石油資源の限界、水資源・食糧資源・生物資源の限界を迎え、人類生存が不可能になっていると、たくさんの研究をベースに示している。それを克服することができるのかどうか課題山積だが、人類が生き残るためにどうすればよいのか、今後の章の展開に期待したい。(文責 中瀬)